2014. 12.30

第 9 回　日本胸部外科女性医師の会

（9th meeting of Women in Thoracic Surgery in Japan）

－活動報告書（第一版）－

代表世話人

齋藤　綾（東邦大学医療センター佐倉病院）

世話人

冨澤　康子（東京女子医科大学）

林田　恭子（草津総合病院）

はじめに

2006 年に第 1 回日本胸部外科女性医師の会を開催して以来、今年で 9 年目を迎えることが出来ました。女性外科医の存在が徐々に認識される中で胸部外科を含む医療領域における女性医師の役割・責任について一段と期待されるようになりつつあると思われます。地位の向上や就労状況の改善に関する関心も高まり多くの集会や学会の場で女性外科医師のあり方や未来について議論される機会が増えました。現時点では胸部外科領域における女性医師の絶対数は少なく職場環境作りや工夫に関する具体的な試み・経験については限りがあるように思われます。他領域での状況・試み・成功例モデルについて識ことは我々にとってより良い職場環境作りを実現する上で貴重な情報源になると考えられます。

今年も日本胸部外科学会および日本医師会の共催のもとで、第 67 回日本胸部外科学会定期学術集会に併設し第 9 回集会を開催することができました。今回の集会では、九州大学大学院医学研究院　保健学部門の教授でいらっしゃる樗木　晶子先生より九州大学を基盤に展開されている復職支援「きらめきプロジェクト」やその他の試みについてご講演を頂くことができましたので要旨のご紹介と共に会の内容について御報告いたします。

第9回日本胸部外科女性医師の会

Women in Thoracic Surgery

開催のご案内

皆様方のご支援ご協力を賜り、「日本胸部外科女性医師の会」は第67回日本胸部外科学会定期学術集会（会長：富永隆治先生）の期間中に開催いたします。

性別・職種を問わず、歓迎いたします。ぜひ皆様、ご参加ください。朝食会形式で行います。世話人一同心よりお待ち申し上げます。

日時：2014年10月2日（水）8:00～9:30 （7:30 開場）

会場：福岡サンパレス 1F　レストラン ラグーン

参加費：1,000円

講演題目：プロフェッショナルと女性医師

講師：九州大学大学院医学研究院保健学部門 教授

樗木 晶子先生

【主催】日本胸部外科女性医師の会
【共催】日本胸部外科学会
日本医師会

代表世話人：齋藤 綾 （東邦大学医療センター佐倉病院）
世話人：冨澤 康子（東京女子医科大学）
林田 恭子（草津総合病院）
事務局：東邦大学医療センター佐倉病院
心臓血管外科医局内
E-mail：wtsjapan-adm@umin.ac.jp

（デザイン：林田　恭子）

第 9 回日本胸部外科女性医師の会　（開催概要）

日時：　10 月 2 日（金）　8:00~9:30

会場：　福岡サンパレス　1F　レストラン　ラグーン

講師：　樗木　晶子先生

（九州大学大学院医学研究院　保健学部門　教授）

講演タイトル：プロフェッショナルと女性医師

参加者：（アイウエオ順、敬称省略）

荒川　三和	安佐市民病院	心臓血管外科
請川　誠自	エドワーズライフサイエンス株式会社	
宇田川晴司	虎ノ門病院	消化器外科
落合　由恵	JCHO九州病院	心臓血管外科
神吉佐智子	大阪医科大学	心臓血管外科
齋藤　綾	東邦大学医療センター佐倉病院	心臓血管外科
佐藤　礼佳	兵庫医科大学病院	臨床研修医
滝原　瞳	群馬県立心臓血管センター	心臓血管外科
竹内　紘子	自治医科大学付属病院さいたま医療センター	心臓血管外科
冨澤　康子	東京女子医科大学	心臓血管外科
富永　隆治	九州大学	心臓血管外科
新津　早織	兵庫県立医科大学	臨床研修医
林田　恭子	草津総合病院	心臓血管外科
松田　和久	ニプロ株式会社	総合研究所
松本　卓子	済生会栗橋病院	呼吸器外科
八木　洋子	八戸西病院	
山崎　祥子	京都府立医科大学	心臓血管外科

（計　17 名、世話人を含む）

集会概要：

2014 年 10 月 2 日、第 67 回日本胸部外科学会定期学術集会の会場の一角で、朝食を朝食会形式で集会が開催されました。

日本循環器学会において臨床・教育・男女共同参画など多方面において全国的にご活躍される樗木　晶子先生をお迎えしてご自身の経験談や九州大学を基盤に展開されるプロジェクトについて約 1 時間にわたりご講演いただきました。

―講師　御略歴―

1979 年（昭和 54 年）　九州大学医学部医学科卒業
九州大学医学部附属病院　循環器内科　研修医
1980 年（昭和 55 年）　メイヨ・クリニック訪問研究員
1984 年（昭和 59 年）　九州大学大学院医学研究科博士課程修了
1989 年（平成元年）　九州大学医学部附属病院　助手
1993 年（平成 5 年）　同上　講師
1996 年（平成 8 年）　九州大学医学部保健学科　助教授
2000 年（平成 12 年）　同上　教授
2007 年（平成 19 年）　九州大学大学院医学研究院保健学部門（名称変更）　教授
現在に至る。

―以下講演内容要旨―

講演題目：「プロフェッショナルと女性医師」

講演内容：医療／医学の歴史における女性の貢献の機会は決して順調に与えられていたわけではなかった。古代においては男性だけではなく女性医神も存在し比較的性差のない環境であったが、中世に入り教会主導で女性は医学会からしばらくの間追放されていた。女性が再び医師として医療現場へ復帰したのは近代に入ってからであった。記録で確認できる始めての女性医師は 19 世紀前半・英国における Dr. James Barry であったが、名前も含め生涯男性で通し没後に始めて女性であったことが判明した。一方、米国では 1893 年からようやくジョンズ・ホプキンス大学医学部へ女性の入学が認められた。日本における女性医師第 1 号の誕生は萩野吟子先生（1885 年）であった。また 1900 年には吉岡弥生先生により東京女子医科大学が設立され、日本医学における女性医師教育の確立は欧米に然程遅れることはなかった。しかし、日本でのその後の女性地位確立は常にトップダウンで進められてきたことが、女性ら主体に権利を獲得してきた諸外国と様相を異にする。

平成 21 年の統計では日本における女性医師数は 59641 名（19.7%）、医学部生に女性の占める割合は 31.5%といわれる。諸外国では既に女性医師が 30－40%

達しており、日本はやや遅れをとっている。更に、日本の医師数は 2.36 人／人口 1000 人（諸外国：平均 3.2／1000 人）と患者に対する医師数は少なく対 GDP 総医療費も G7 の中で最下位である。一方で患者あたりの病院受診回数は諸外国より日本で高い。従って、少ない医療費・少ない医療スタッフで多大な医療業務を担っている日本の現状がこれらの統計からうかがわれる。
女性医師の就業率はM字カーブを描くといわれる。即ち卒後は順調に就業するが、結婚や妊娠をきっかけに一時低下する（卒後 11 年目、36 歳あたりで 76%に低下）。その後再び上昇し年齢と共に就業率は再び低下する。このように医師全体に女性医師の占める割合が増える中で、様々な環境の下で働き盛りの 30 歳代で離職または休職するケースが少なからず生じ、医師不足→過重労働が一層深刻化している。それに対するこれまでの国の政策は緊急避難的なものに留まり根源に迫るものではなかったと言及されている。
次には、樗木先生ご自身の循環器内科医として、看護大学での教育者としての経歴について触れられた。当時はあらゆる医局（特にメジャー内科・外科）で女性を敬遠する姿勢をあからさまに出来ていた時代で、ウィットに富んだ表現で興味深く経験を語られた言葉の裏には樗木先生ご自身の多大なご苦労が伺われた。更に 52 歳より着手された女性医師の復職支援「きらめきプロジェクト」についてご紹介された。文部科学省から支給された 3 年間で 3000 万円の助成金を基に、諸事情により医局員としての常勤職・ノルマへの追随を困難とする医師が医局の枠外でキャリアが途絶することなく大学病院（九州大学）に在籍することが可能となった。同プロジェクトは、文部科学省からの助成終了後は資金源が病院の予算に組み込まれ現在も継続されている。この際もプロジェクトに所属する非常勤医師らの病院収益への貢献を実際の金額で事務方の協力の基で提示しプロジェクトの資金源となるようご尽力されたいきさつについてもお話しいただいた。プロジェクトの目的についても言及された。即ち、ネットワーク作りや国税により育成された医師が果たすべき責務（就業継続など）、ロールモデル、ジェンダー学や性差医学を識り学生講演会や交流会を開催することで啓発活動・情報発信の足場として活用するなど多彩に利用されているようであった。また離職を迫られる理由は育児だけとは限らず介護・各種疲労などが原因になることもあり、最近では男性医師からの申請があったとのことであった（給料があまりにも低く実現に至らず）。

以上、非常に多岐にわたる話題のご講演を頂き、約 1 時間があっという間に過ぎていきました。

（文責：齋藤　綾）

第9回日本胸部外科学会女性医師の会
プロフェッショナルと女性医師

おわりに

今年度の集会では、樗木先生ご自身がご苦労された経験談や大学を基盤に医師のみではなく医療事務も含めた多角的な復職支援プロジェクトについて貴重なご講演を拝聴することが出来ました。特に、働き盛りの 30 歳代医師が家庭の事情などにより止む無く離職する場合の経済的損失などについて実際の数値で説明していただくなどにより「何故復職支援がこんなに大切であるか」という問いに対する一つの回答が示されたように感じられました。医療スタッフのキャパシティーに併せた適正配置・適正賞与など、制度として支援することが「過酷」といわれる胸部外科領域の労働環境の改善や　　ケースが多くその経済的な損失につ可能性が高い胸部外科とは異なる分野での職場環境改善に関する試みについて数々の情報がこの職場環境改善の問題は最終的には女性医師のみの問題ではなく職場の同僚が上手に共存し工夫を重ねることによって初めて解決できる難しい問題であると思われます。今回の集会では臨床現場で頑張り続ける女性医師のみならず大学講座や部局を運営なさる立場の先生方にも多くご参加いただけました。今後の職場環境・医師接遇・若手医師や医学部生の教育を一連のシステムに組み込めるような職場運営に繋げる上で今回の集会が情報源となりますよう祈る次第であります。

胸部外科領域においても他の分野と同様に女性医師の割合が今後大きくなることが予想されます。これからも、WTS では様々なゲストを迎え様々な話題を取り上げ勉強会・講演聴講・ディスカッションの場を設定し多くの方がネットワークを拡げる機会として利用していただけますよう、世話人一同邁進する所存でおります。

本会の開催にあたり、富永　隆治先生、日本胸部外科学会事務局の皆様、参加者の皆様、株式会社コングレの方々をはじめご協力いただきました多くの方々へ末筆ながら心よりお礼を申し上げます。

2014 年 12 月

代表世話人　齋藤　綾